

1-8					
主題	食事作りを通しての、自立支援と地域とのつながり				
副題	地域の一員として、かかわりを持ちながら生活するための社会参加				
キーワード 1	自立支援	キーワード 2	地域	研究(実践)期間	3ヶ月

法人名・事業所名	社福) 翠生会 音羽台レジデンス				
発表者(職種)	古川彰宏(ユニットリーダー)				
共同研究(実践)者	杉澤健作(ユニットリーダー7)				

電話	03-3939-0200	FAX	03-3939-0299
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	音羽台レジデンスは「生き心地のいい場所」「最期の場所」「地域とつながる場所」の3本の柱のもと、様々なことに取り組んでいます。本人のいないところで本人ことは決めないという方針で、どんなことでも入居者の方たちと対話をし、どのように生活したいか、どのように生きていきたいかを話し合いながら支援しています。				
-------	---	--	--	--	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

音羽台レジデンスはユニット型特養、研究対象のユニットは協力ユニット合わせて18床、平均介護度4.0 日常生活自立度の平均はB2、認知症生活自立度の平均はⅢb。

平均介護度も高く、重度化が進む中、特養においての主な自立支援と言えば、オムツを使わないでトイレでの排泄の取り組みや、入浴を機械浴でしないなど、3大介護を中心とした自立支援が主なケアになっている。

もちろんそういった取り組みは大事だが、日々の生活の中で本人が出来る事やしたいことを実現しながら、社会的欲求や承認欲求を満たし、本当のニーズは何かを考え、本人のストレングスを中心に自立支援に向かったケアをするべきだと考える。

施設という集団生活の中での生きがいや、生活をどのようにしていくべきかを考え、環境を整える支援をするため、食事作りの過程を特養に取り入れることにより、生活の質が向上するのではないかと仮説を立て研究を実施した。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

平均介護度が4を超えている中、認知症共同生活介護の施設より異動した職員が、入居者の方達をアセスメントしていく中、特養に入居している方達も、もっと色々な事が出来るのではないかと考え、ADLや認知症の進行の予防も含めて、食事作りというものを通して特養での社会的欲求や承認欲求を満たす、自立支援を実現できるのではないかと期待し取り組んだ。

《3. 具体的な取り組みの内容》

自分たちで食べたい物を決め、作っていく。その過程でできることの喜びを通じての入居者同士のコミュニケーションのきっかけを作っていく。

メニューを決め、必要なものを買って物に出かけ地域の資源の活用や社会に触れ合っていく。

- ① 対象者：1ユニット9名×2 合計18名
- ② 取り組みの具体的な手法：入居者の方に何が食べたいか確認し、皆で決めたものを役割分担し調理を実施。
- ③ 取り組み時間や期間：買い出しは事前に実施。メニュー決めも前日に決める。当日は9時ぐらいから下準備し12時前には終了しみんなで食べている。(期間は毎週実施(昼食のみ)1回/週)
- ④ 取り組んだ手順：職員で打ち合わせ。入居者の方と都度打ち合わせ
- ⑤ 取り組んだ職員数や構成：介護職員12名 介護補助2名 管理栄養士1名
- ⑥ 部署間の連携：栄養課とは都度何回も打ち合わせをする。
- ⑦ 使用した道具や費用：費用は人数分の毎日の食費の合計(昼食のみ) 道具は栄養課や既存の施設の物を使用。
- ⑧ 活動の成果を出すポイント：入居者の皆さんで話し合い決めてもらう事。(自己決定をしてもらうこと)
- ⑨ 取り組みに対する施設のバックアップ体制：シフト調整や人員の確保。費用の一部負担。

《4. 取り組みの結果》

当初、イメージがわからないのか意見があまり出ず、職員からの提案でメニューを決めていたが、一度やると、『また餃子が食べたい』など意見が出てきた。

普段、意思疎通が難しい入居者様のご家族より、『こんなに目を開けていることは無いので、この場所にいてもいいですか』と、ご意見を頂くことや、食思が思う様に進まない入居者様より『ご飯ください』など積極的な反応あった。

作ったものを実際召し上がった際に、食事量の少ない方がいつもより多くみられ、覚醒が良く召し上がった。食事中、食後に味の感想を言い合うなどのコミュニケーションのきっかけになったと感じた。

同フロアの実施外のユニットよりも入所者、職員が見学にきてやってみたいなどの意見が出た。

調理前の具材を直接見て触れることで、重さなどを感じて女性の方は『こんなのがいいのよ』など野菜を選ぶポイントを思い出され、その方の本来もつ能力を引き出すきっかけにもなった。

買い物の際には、スーパーのレジの店員さんともコミュニケーションを取られるなど地域の一員として関わりをもち社会参加の意識を持たれていた様子も伺えた。

《5. 考察、まとめ》

普段行っていない事で、従来行っていたことをやることで自分らしさを取り戻すきっかけや、意思表示をすることで、地域や社会参加の良いきっかけになったと思われる。

また、メニュー決めや実際召し上がった時の感想などでコミュニケーションを取ることで、自分たちで作ったという自信を持たれ「役割」の重要性を再確認することが出来た。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

なし

《8. 提案と発信》

特養という施設形態での運営で、食べる事の様々な問題点を考えさせられた。食形態や衛生環境、設備など乗り越える事は多いと思われるが、それ以上のことを得たように思えます。

食事を作る。普段何気に行っていることでも、とても重要で生きる根幹にもなっている事だと感じました。